

ウィリアム・ブレイク

『ヨブ記』
第7図「ヨブを慰める人たち」

1825年 | エッチング・紙

坂本龍太



ウィリアム・ブレイクは1757年にロンドンに生まれた詩人、画家、版画家。自作の詩の挿絵を始め、ダンテの『神曲』やミルトンの『失樂園』、そして聖書などを主題とした絵画を手掛けた。『ヨブ記』は旧約聖書の書のひとつで、敬虔なヨブの信仰を疑ったサタンが神に許可を得て、ヨブに数々の苦難を与えその信仰を試す物語。ヨブは多くの苦難に耐えるも神の知恵を疑ってしまう。それでも最終的に悔い改め、信仰を守って神から祝福を受けた。

本作で描かれているのは、苦難を経て疲弊したヨブのもとに三人の友人が訪れる場面。画面左の三人の人物は、ヨブの友人エリファズ、ビルダド、ツォファルで、変わり果てたヨブの姿を見た彼らは、大仰な身振りでその驚きを表している。他方、妻に支えられて腰布一枚で横たわるヨブの姿は痛々しい。こうしたヨブの姿にはミケランジェロの《ピエタ》(ヴァチカン、サン・ピエトロ大聖堂)の影響が指摘される。また、画面右端に十字型をした柱のようなモチーフが描かれており、ブレイクが意識的にキリストの哀悼場面を下敷きにした可能性は高い。加えて、伝統的にヨブの苦難はキリストの受難に重ねられる。

ただし、ヨブの妻は哀悼のポーズというより、手を挙げて驚きを表しているように見える。上部の題辞には、「われわれは神から幸を受けるのだから、災いをも受けるべきではないか。(ヨブ記2:10)」という一文が記されており、これはヨブの妻が「神を呪って死ぬ方がまし(ヨブ記2:9)」と言ったことへのヨブの返答であるから、作中のヨブの妻は、災いを被ってもなお、神を信じるヨブの態度に驚いている姿と読み取ることができよう。対してキリストの姿に重ねられたヨブからは光輝が放たれ、その高潔な精神が強調されている。ブレイクはテキストとイメージを巧みに組み合わせ、苦難を受け入れるヨブの姿をドラマチックに描出した。

屋外彫刻の
清掃

藤田響



ジャコモ・マンズー(ジュリアとミレトの乗った大きな一輪車)の清掃風景
2022年10月22日撮影

三重県立美術館では、ボランティア団体「櫻の会」の協力を得て、定期的に屋外彫刻のメンテナンスを行っています。

屋外で展示している彫刻作品は、緑豊かな環境にあるので、蜘蛛の巣が付いたり、落ち葉がたまったりと汚れが目立つようになります。鑑賞の妨げになるだけでなく、作品が傷む可能性もあるため、永続的に鑑賞していただけるよう、メンテナンスと清掃をしています。具体的には、柔らかいブラシやスポンジを使用し、何度も水で流しながら、表面の付着物を取り除いていく作業となります。作品の状態や素材の性質に合わせて、道具や洗い方をその都度変更し、丁寧に汚れを落としていきます。完璧に汚れを落とした人工的な美しさではなく、作品が重ねてきた年月を活かし、自然な美しさを目指して、彫刻に負荷をかけない範囲で清掃します。

メンテナンスの様子を目にする機会は少ないかもしれませんが、季節の移ろいと共に、屋外彫刻の変化にも是非ご注目いただければと思います。

表紙解説

「笠岡市立竹喬美術館名品展

おのちつきょう
小野竹喬「自然と私の素直な対話」より

道田美貴

高く伸びる樹々は夕陽をあびて金色に光り、樹間にのぞく空は茜色に染まる。空には青い雲が浮かび、新緑の葉が画面を覆う。夕暮れ時、刻一刻と表情を変える自然が見せる美しさを捉えた本作は、京都画壇を代表する日本画家・小野竹喬(1889-1979)が85歳で描いた心象風景である。



小野竹喬《樹間の茜》1974年
笠岡市立竹喬美術館蔵

自然との対話を重視し、四季折々の日本の風景を描き続けた竹喬は、空を多く手がけ、「空の画家」とも称された。そこには、父の背中を追う日本画家を志しながらも、26歳でその生涯を閉じた一人息子の存在がある。戦後、竹喬は、「戦死の報を受け取ったとき、その魂が空にあるような気がした。あのふわりと浮ぶ雲に、その霊が乗っているのではないだろうか」と綴った。さらに、矛盾虚偽の溢れる世の中でも平和を望む心は否定できず、自然と交渉を持つ心は平和を欲する、と続けている。この茜色の空にも、亡き息子への想いと平和への祈りがこめられているのだろう。

利用のご案内

開館時間 |
午前9時30分 - 午後5時(入館は午後4時30分まで)

休館日 |
月曜日(祝休日にあたる場合は開館、翌平日閉館、
2023年5月1日は開館)
2023年7月18日(火)、9月19日(火)、10月10日(火)

観覧料 |

- 常設展示
[美術館のコレクション+柳原義達芸術/特集展示]
一般 310(240)円
学生[大学・各種専門学校等] 210(160)円
高校生以下無料 ※()内は20名以上の団体料金
- 企画展示/その都度定めます。

※学校の教育活動として県内の小・中・高・特別支援学校等の団体が観覧する場合、引率者も含めて無料となります。
※障害者手帳等(アプリ含む)をお持ちの方が観覧する場合、付き添いの方1名を含めて無料となります。
※家庭の日(毎月第3日曜日)の観覧料は、各展覧会(企画展/常設展)の団体割引料金となります。
※県民の日[2023年4月15日(土)]は、常設展の観覧が無料となります。

メールマガジン |

三重県立美術館の情報を、みなさんのパソコン、携帯電話へお届けします。購読料無料。詳しくは、美術館ウェブサイトをご覧ください。

美術館公式Twitter |

三重県立美術館の最新情報をリアルタイムで配信しています。Follow us on Twitter @mie_kenbi

三重県立美術館

MIE PREFECTURAL ART MUSEUM

〒514-0007 三重県津市大谷町11
TEL.059-227-2100(代表)
FAX.059-223-0570
https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/

交通 |

津駅(近鉄・JR)西口より徒歩約10分または、津駅西口1番のりばより三重交通バス「西団地循環」、「津西ハイタウン行き(むつみ・つつじ経由)」、「夢が丘団地行き(総合文化センター前経由)」、「総合文化センター行き」のいずれかに乗車約2分、「美術館前」下車徒歩約1分
※できる限り公共交通機関をご利用ください



三重県立美術館友の会へのお誘い

友の会は三重県立美術館を支える団体として活動しています。研修旅行、美術講演会、懇親会等、会員同士の楽しい交流や美術の教養を深める催しに参加できます。

年会費 |

一般会員:3,000円 ペア会員:5,000円
グループ会員(4名):8,000円

◎特典

会員鑑賞券配付、観覧料半額割引、レストラン・ミュージアムショップご利用割引等。詳細は三重県立美術館友の会事務局(TEL 059-227-2232)までお問い合わせください。

公益財団法人 三重県立美術館

協力会賛助会員へのお誘い

美術館の調査・研究事業補助、カタログなど美術資料の作成頒布等、美術館活動活性化のための事業をおこなっています。主旨にご賛同いただき、賛助会員へのご加入をお願いします。

会費 | 年間一口

法人:50,000円 個人:25,000円
準会員:10,000円

◎特典

展覧会ならびに内覧会への招待、各展覧会のカタログ謹呈等。詳細は三重県立美術館協力会事務局(TEL 059-227-2232)までお問い合わせください。

三重県立美術館ニュース

HILL WIND
52
MIE PREFECTURAL
ART MUSEUM
NEWS

三重県立美術館ニュース
「HILL WIND 52」

発行日 | 2023年3月22日(第1刷、無断転載)
企画・編集・発行 | 三重県立美術館 デザイン | 清田尚子 印刷 | 株式会社アインレーン



生誕100年 元永定正展を ふりかえって

原舞子

2022年、開館40周年を迎えた三重県立美術館では、江戸期から20世紀後半までの三重にゆかりのある作家を紹介する3本の記念展と、美術館40年の歩みを西洋美術のコレクションを軸に振り返る展覧会を企画展として開催した。これらに加えて、特集展示として「生誕100年 元永定正展」を開催した(2022年9月6日～12月11日)。

元永定正は1922年に現在の三重県伊賀市に生まれた。子どもの頃に抱いた将来の夢は、映画俳優か歌手か絵かき。10代の終わりから20代の間は、郷里伊賀や関西を行き来しながら様々な職に就き、漫画や絵画を描いていたという。1950年代に神戸へ出てから関西の前衛美術運動と出会い、吉原治良が主宰する具体美術協会の一員として活動するようになる。私たちが今知る、現代美術家・元永定正はここに始まったと言ってよいだろう。その後の元永は、1960年代半ばのニューヨーク滞在などを経て、ユーモラスでらかな「かたち」が踊る作品を制作し、大人から子どもまであらゆる世代の人々に愛される芸術表現を生涯展開した。

2022年は元永の生誕100年という節目の年にあたり、年初より様々な展覧会が開催された。元永をはじめとする「具体」の作家の作品を多く所蔵する兵庫県立美術館では、伊賀、兵庫、そしてニューヨークという拠点の変遷をたどりながら作品を展覧する「生誕100年 元永定正一伊賀上野から神戸、そしてニューヨークへ」が半年間開催された(2022年1月22日～7月3日)。ここでは、元永の初期の立体作品など貴重な作品に加え、同館を代表する「山村コレクション」

も展示された。山村コレクションは、兵庫県西宮市に在住していた山村徳太郎氏が収集し、没後に一括して同館に収蔵された戦後日本の前衛美術の作品群で、その中には元永の重要作品が多数含まれている。作家自身の移動とともに、コレクターをはじめとする作品の受け手の変化もまた、作品の成長に大きな影響を及ぼすものだと

感じ入る機会であった。

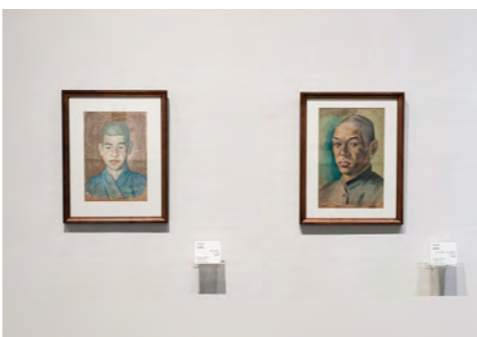
秋には、元永が長らく制作と生活の拠点としてきた宝塚市の宝塚市立文化芸術センターで「生誕100年 元永定正のドキュメンテーション」展が開催された(2022年9月10日～10月10日)。ここでは、絵画や立体などのいわゆる作品に加え、スケッチ、写真、模型、展覧会記録、映像など、元永の活動の軌跡を振り返る資料が展示された。膨大な数の資料を通して、元永定正という一人の人間の飽くなき探究心に触れることのできる展示内容だった。

また10月には郷里伊賀において、「生誕100年 元永定正展～一寸先は光 伊賀が生んだ美術の滑稽～」が開催された(2022年10月1日～10月31日)。史跡旧崇広堂という旧藩校を会場にした同展では、量数きの展示空間に元永の絵画、立体、映像作品が展開され、美術館の空間とは異なる場で元永芸術を味わうまたとない機会となった。会期中の元永の命日には、故人を偲ぶ「くれない忌」が伊賀市内で開かれ、改めて元永の人柄や残したものの大きさを感じる1日となった。

さて、最後に、当館で開催した元永展についても触れておきたい。当館では、過去に二度、大規模な元永展を開催している。いずれも作家存命中のことであり、初期から最新作までを一室に展示する大規模個展であった。この2回の展覧会以外にも、コレクション展示等で収蔵作品を中心に元永の作品を折に触れて紹介してきた。しかし、そのほとんどが1950年代以降、つまり元永が関西に出て、具体のメンバーとして活動を始める時期からに絞られていた。今回の特集展示では、新たな切り口として伊賀時代の作品にも焦点をあて、郷里伊賀が元永の芸術にとっての源流ともいべき存在であったことを作品や資料を通して紹介することを目的とした。会場からは、全く知らない部分だったという驚きの声があがるとともに、どのような画風、時代であっても元永さんは元永さんらしい、という感想も多くいただいた。全く同感である。この1年を通して、いつもひた向きに表現に打ち込んだ元永さんを身近に感じる事ができたように思う。

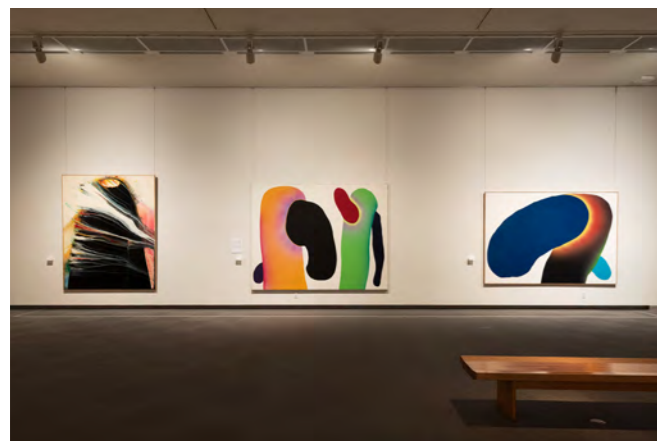


第1回具体美術展(1955年)の出品作。



10代終わりから20代頃の元永の自画像。
写真撮影：松原 豊

当館での展示風景。
「絵の具流し」の時代から
ニューヨーク時代の作品。



美術館とコミュニケーション

— 同一内容・同一時点の情報保障とは

鈴木麻里子

はじめに

情報保障とは、障がいの有無にかかわらず、誰もが情報を得る権利を保障することです。2022年5月、いわゆる「障害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法」¹が公布・施行されました。同法の基本理念には、障がいのある人が障がいのない人と同一内容の情報を同一時点において取得できるようにすること等が掲げられています。「コミュニケーション・プラットフォーム」をめざす三重県立美術館にとって²、利用者とのやり取りや利用者同士のコミュニケーションは、不可欠な活動です。この記事では情報保障にまつわる当館のさまざまな取組を紹介します。

音声を見る

2019年、当館では初めて聾学校に通う生徒の職場体験実習の受入を行いました。展示だけでなく教育プログラムも従来型の開催形式を見直す必要があると強く実感した、あの実習から3年。ようやく当館でも手話通訳・要約筆記付き講演会の開催が実現しました(図1)³。以前から当館ではイベントを広報する際、「手話通訳・要約筆記をご希望の方は事前にご相談ください」という一文を添えていましたが、いまだにリクエストは0件にとどまっています^{ひるがえ}。

翻って、事前に相談しなければ情報が保障されないシステムは、本当に公平と言えるでしょうか。耳の聞こえにかかわらず、誰もが気軽に参加できるイベントを開催する— そのような考えに基づいて、今年度は2回の講演会で手話通訳・要約筆記の実施を試みました。

ならず、誰もが気軽に参加できるイベントを開催する— そのような考えに基づいて、今年度は2回の講演会で手話通訳・要約筆記の実施を試みました。

情報にさわる／聞く

美術館では、配布印刷物や掲示物に文字情報を掲載する機会も多くあります。目が見えない／見えにくい人への情報保障としてこれまで当館が用意した代替手段には、次のようなものがあります。例えばテキストを点字化した点訳、音訳者がテキストを朗読した音訳、アプリを使ってテキストを読み上げる音声コード、インターネット上にテキストを掲載したオンライン版等(図2、3)。また、小さい文字が読みにくい人向けの白黒反転拡大コピーを配布することもあります。さらに、当初から利用者が聞くことを前提に執筆されたオーディオガイドも別途公開しています(図4)。

イメージの伝達

視覚芸術を扱う美術館で伝達されるのは文字情報ではありません。目が見えない／見えにくい人への美術作品の視覚情報の伝達には、触覚や言葉を使う方法が有効と考えられています。

ごく一部の立体作品は直接手で触れて形を捉えることができますが、接触は美術作品に深刻なダメージを与える可能性もあるため、

当館では触察できない作品がコレクションの大多数を占めます。作品にじかにさわれない場合は、線や面を立体的に起こした触図等に触れて情報を収集します。

言葉を使う場合、イメージを言語という異なる媒体に変換することになるため、ニュートラルな翻訳はまず不可能です。当館で作成している2種類のオーディオガイドのうち、1種類は目の見えにくい／見えない人の利用を想定したものです。汎用性の高いガイドを目指して執筆していますが、イメージをテキストに「訳す」際、冒頭で触れた「同一内容」の情報の保障はいっそう困難を極めます。

おわりに

オーディオガイドは単一方向の情報伝達ですが、利用者との対話しながらその人が望む情報を必要なタイミングで提供することに勝る方法はないように思います。コンテンツの充実も重要ですが、対話機会を確保し、複数のツールを組み合わせることで柔軟に対応することが、視覚情報の保障のためには最も有効なのではないでしょうか。

なお、この記事で紹介した取組には、例えば、知的障がいのある人や、盲ろう者に向けた実践は含まれていません。また、利用者から手話や点字印刷物によって情報が発信されたとしても、現時点では館スタッフが同時にその内容を理解することはできません。日本語を母語としないため、同一内容の情報を同一時点で入手できないという人もいますでしょう。コミュニケーションの成立の前には、多くの越えるべき壁が立ちはだかっているのです。



図1 | 連続レクチャー「スペイン美術いまむかし」(2022年12月3日)の様子



図2 | 特設コーナー「さわって楽しむ 柳原義達作品」(2022年11月15日～12月11日)配布リーフレットのオンライン版ページのQRコード。リーフレットの音訳は会場でのCD配布に加え、オンラインでも聞くことができますようにしました。
<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/000267136.htm>
(2023年1月10日最終アクセス、図4も同じ)

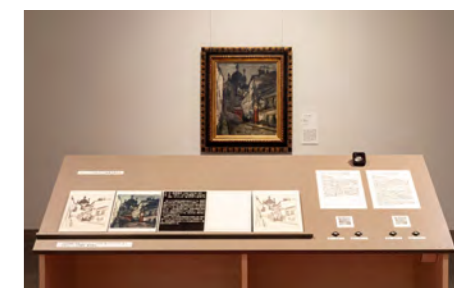


図3 | 企画展「美術にアクセス—多感覚鑑賞のすすめ」展(2021年6月5日～8月1日)の会場風景(撮影：松原豊) 佐伯祐三(サンタヌ教会)の前に、作品解説の点訳や触図、オーディオガイドのスイッチを設置しました。



図4 | 三重県立美術館のコレクションオーディオガイドのページのQRコード
<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/000249071.htm>

註

- 1 | 正式名称は「障害者による情報の取得及び利用並びに意思疎通に係る施策の推進に関する法律」(2022年5月25日公布・施行)。
- 2 | 「三重県立美術館をめざすこと」(2018年3月策定)より。
- 3 | この取組は、令和4年度 文化庁「Innovate MUSEUM事業」に採択された「美術館のアクセシビリティ向上推進事業」の一環として行われました。